インドネシアにおける日本統治と「南方徴用作家」
―阿部知二を中心に―

木村　一信

インドネシアでの体験

皆さんこんにちは。ただいま紹介していただきました木村一信と申します。15分間という短い時間で、日本とオランダによるインドネシア支配を考える、というテーマでしゃべる、というのは大変難しくて、どういう風にお話したらいいのかとまどっています。

私は日本の近代文学を専門にしております。特に、われわれの研究では「昭和10年代文学研究」という風に呼んでいるのですが、その昭和10年代の「戦時下の文学」を専門にしております。最近は、アジア太平洋戦争時に日本では初めていわゆる文化人が、作家も含めてですが、陸軍・海軍の将兵たちと一緒に宣伝班として東南アジア各地の前線に送られました。その「南方徴用作家」と呼ばれている作家たちの文学的活動や言動を調べることに中心をおいています。

私のささやかな体験からお話をいたしますと、16年前ですけれども、初めてインドネシアに行った時のことですが、インドネシア大学の客員教授として1年間滞在いたしました。日本の近代文学を向こうで講義したわけです。その時の体験なのですが、ボロブドゥールの遺跡などで有名な古都、ジョクジャカルタに旅行いたしました。そこで知り合いになったインドネシアの人と、あるホテルのバーでお酒を飲みながら、音楽を聴いて非常にいい気持ちで過ごしていると、横に西洋の方がいらして何気なく私の友達ともしゃべり始めました。私も、片言のインドネシア語で会話を交わしておりました。親しく20～30分ほど会話を交わしていたのですけれども、途中でその西洋の方が突然ぷいっと横を向いたのです。それまでは親しく話をしていたのに、それ以後いっさい私には話をしなくなりました。私より若い人で、「どうしてかな。」と不審に思ってインドネシアの友人に聞くと、「彼はオランダ人なんですよ。」と教えてくれました。つまり彼は私が日本人だとわかった途端に横を向いて、私を拒否したのです。私は戦後まもなく生まれまして、戦争を直接には体験していない世代です。その私より若い西洋の方も、もちろん戦争を知らない世代ですけれども、私の方にはそのような意識はなかったのですが、私が日本人だとわかった途端にオランダ人の彼からはっきりと拒絶されました。このことは非常に強烈な体験で、戸惑いを覚えました。

さらに、もう一つの体験があります。1994年に、「南方徴用作家」の資料調査のために半年の留学期間を与えられまして、インドネシアの大学や図書館などでいろいろと文献を調べていました。8月17日はインドネシアの独立記念日です。8月17日の前後になりますと、「インドネシア独立」をテーマにした特集などのテレビ番組が種々と放映されます。その時、私は半年間、インドネシア人の家庭に下宿していまして、インドネシアの大家族の中で暮らしていたのです。

「証言」という映画が8月17日の夜にテレビで上映されました。下宿の人たちと一緒に何気なくその映画を見はじめていたのですけれども、その映画は日本のインドネシア支配時代を題材にした映画で、日本の軍人が非常に粗野な人物として登場しました。すべての日本の軍人がそうではなかったと思いますけれども、インドネシア人が最も嫌う風にステレオタイプ化された人物として描かれていました。インドネシア女性を日本軍人の慰安婦にするというストーリーで、私が下宿していた家には大学生・高校生の娘さん・息子さんがいましたので、だんだん一緒に見ていられなくなってきまして、非常に居心地の悪さを感じはじめました。下宿していた家の主人が、「これは過去の話で、今は日本とインドネシアとは経済的にも非常に深いかかわりがあるのだから気にすることはない。」と言ってくれましたが、それでも身の置き所がない思いをしました。

南方徴用作家

インドネシアにおける一つの体験として、日本人であるということでオランダ人から拒否されました。また、インドネシアの人と深く関わったつもりでも、ある歴史的な事実を前にして、居心地の悪さを感じるよ

うな立場にたたされることも味わいました。日本人がすべて残虐で悪い、というわけではないのですが、このような場合に、私たちはどうしたらいいのでしょうか。特に、これからの時代、東南アジアに出かけ、その地の人びとと交流したり、一緒に仕事をしたりする若い人たちに対して、あなたたちが、もしもそのような立場に立たされたらどのように対応したらいいのか。このことが、私の一つの問題意識として自分のささやかな体験から芽生えてきました。

皆さんが観光などでシンガポールへ行った折、中国系のシンガポール人の方から戦争のことを追及されたとしたら、どのように対応するのか。これは日本人にとっては、やや大げさに言えば、国民的課題として答えないといけない事柄なのではないでしょうか。「すみません。」と謝るのか、「そんなこと知らないよ。これは過去のことで、私には関係ないよ。」とつっぱねるのか、あるいはそれ以外の何らかの反応をするのか。これはやっぱり私たちに与えられた課題であり、これが私にとっての問題意識の発端になっています。

アジア太平洋戦争が始まると同時に、南方、すなわち今の東南アジアなどの地域へ、当時の中堅、大物と呼ばれる作家たちが70人から80人の規模で各地に送られました。これらの作家は宣撫・宣伝活動に携わり、多くの文章を日本の新聞・雑誌や現地で出している新聞・雑誌に書いたり、あるいは日本語教育活動に携わったりしました。

ほとんどの作家たちは半年から２年の滞在ののち日本に帰ってくるのですけれども、その作家たちの言説が戦後、全集に入らなかったり、作品集に収められなかったりしています。これは戦争責任の問題が、戦後に非常に厳しく追求された事柄と関わってくるからです。このことは、作家に限らなくて、画家とか音楽家とかカメラマンとかジャーナリストとか映画監督とか学者とか、徴用を受けて東南アジアに送られた多くの人の場合も同じようなことがあります。

文学の立場からいえば、戦争責任は別として、こういう作家たちの文章が歴史的、客観的な事実として書かれていた、ということを私たちはまず認識し、それを共有しなければいけないと思います。そうでなければ先ほどの最初に申しあげました問いかけ、すなわち「若い人たちも含め、私たちがそのような立場に立たされた時にどう答えればいいのか。」という問いには答えられないのではないでしょうか。

そこで、私は、「南方徴用作家」の文章を取りあえず、客観的事実ということで集めてみようと思いました。その後に、それらを読み、分析し、評価することで、歴史的認識という域にたちいって、それぞれの立場から先ほどの問いに対しての答えが出せるのではないかと考えたわけです。そういうことで、私なりに現在、『南方徴用作家叢書全60巻』というのを構想しまして、まず「ジャワ編15巻」を数年前に刊行し、続いてビルマ編、マレー編をいま、編集しているところです。

そこでわかってきたことは、彼ら、つまり南方へと送られた作家たちが一様に軍の宣撫・宣伝活動に従事させられていただけではなく、彼らがさまざまな対応をしていることがわかります。もちろん「大東亜共栄圏」を単純に信じて、全くそれにのっかった形で文章を書いている作家もいます。けれども、占領地での体験を自分の文学的テーマに関わらせ、その文学的テーマを必死に追求しようとする姿勢がうかがえる作家もいます。それは作家でなくとも、軍人としてあるいは民間人として各地に送られた人たちの場合においても、同じだったであろうと思われます。それぞれの人生の生き方において、それぞれの土地、人びと、置かれた状況と関わったというべきではないかと、作家たちの言説を通して考えたりいたします。

戦争を旅にたとえるのは非常に不見識ですが、有名な哲学者三木清の『人生論ノート』の中に、「人は、人それぞれの旅をする。」という有名な言葉がありますが、同じ旅をしていてもそこから受け取るもの、見るもの、聞くもの、その意味はやはり違うわけです。それぞれ背負っている境遇や条件、また資質などに応じて、人はそれぞれの対応をするということが、作家たちの文章を見ているとよくわかります。とはいうものの、やはり戦争とは非常に悲惨なものであり、過酷なものです。

阿部知二の場合

その中の一人である阿部知二という作家を、私は、いま研究しています。阿部知二はジャワに送られた作家の一人です。1942年（昭和17年）３月１日のバンタム湾沖の上陸作戦に阿部知二も参加しまして、武田麟太郎、北原武夫、大宅壮一、浅野晃らと一緒にジャワ進攻に加わりました。阿部の乗っていた船は沈められ、海を泳いで、上陸していく体験をするわけです。そして３月９日、「蘭印」つまり、オランダ軍が全面降伏します。日本軍の宣伝班員としての活動が始められます。

阿部がそれまで書いてきていた作品は、ヒューマニ

ズム色の強い作品が多かったのです。阿部は作家であると共に英文学をも研究していましたが、それゆえ西洋に対するあこがれというものを強く持っている人でした。ジャワに派遣される直前に刊行した小説は「旅人」という作品で、日本とオランダとの400年前から始まった関わりや、長崎の出島を中心にして日本の鎖国時代にはオランダが唯一西洋なるものを日本に伝えてくれる国であった、ということを題材にして書いています。

そういう小説を書きあげた直後に、オランダ領であるジャワに徴用されます。ジャワに行くことに運命的なものを感じ、そこで阿部はさまざまなことを考えたわけです。阿部は、日本の軍政についても、見るところをきっちり見ていると思います。

当時の日本は、ジャワ侵攻に関して、西欧列強の植民地からのインドネシア解放というスローガンを掲げていました。1941年の大本営政府連絡会議における決定によって、南方を占領した場合、どのように運営していくかということについて、治安確保・資源獲得・現地自活ということを掲げています。ところが、当初は3か月はかかるであろうと思われていた戦闘がわずか9日間で終わりました。うまくいったということで、インドネシアに対して日本軍は非常に厳しい統治をします。インドネシアは今村均が軍司令官だったことなどから、統治の初期は緩やかさはあったのですが、インドネシア国旗としてインドネシア独立派の人たちが掲げようとしていた「紅白旗」も掲揚が禁止され、国歌として歌おうとしていた「インドネシア・ラヤ」の歌も禁止される、そういう状態でした。インドネシアからの収奪が厳しくおこなわれていくわけです。今村均中将も生ぬるい統治だということでラバウルの方へ転任させられます。

そうしたことを阿部はつぶさに見ていたわけです。自分のオランダ、西洋に対するあこがれがある一方で、自分は彼らからすれば敵方の人間であり、オランダを支配し、インドネシアにたいして厳しく統治する軍の一員である、そういうジレンマの中で1年近くを過ごすことになります。

それについて阿部は戦争中は書けないのですが、戦後の1946年から発表しはじめる「ジャワもの」と呼ばれる作品の中で一気に噴出させます。その時に彼が問題意識として持ったのは「被害者であり、かつ加害者であるという状況に置かれた自分のこの怪しい事態、その正体を解き明かしたい。」ということでした。阿部は一方では被害者でありました。戦争で無理やり徴用を受けて現地に連れてこられて、宣伝活動に従事させられました。しかし一方、末端とはいえ、軍の一員として加害者側の人間として振舞わざるを得なかったのです。そうした中で時間を過ごしたわけです。自分はいったい何をしていたのかという問いかけを戦後のジャワを舞台にした作品に書いていきます。

しかし、戦後の新しい作家たちの登場もあり、阿部は、文壇の主流からはややはずれたところにいることになり、「ジャワもの」なども正面から論評されたりはしないままになります。

それから55年ほど経ちました。もう一度阿部知二の戦時中の文章を読み、戦後の作品をも読み、阿部だけではなく、井伏鱒二、武田麟太郎、北原武夫その他の多くの徴用を受けた作家たちの作品を全部読んでトータルとして捉え、最初の問いに答えなければならないと思います。そして、戦争を知らない世代に対しても（そこに、私自身も含まれるのですが）、いかにしてこういう体験・歴史を受け継いでいくべきか、ということを共に考えていきたいと思っています。

最後にもう一言つけ加えます。アジア諸国と私たちとの関係（もちろん、他の地域も同じですが）は、21世紀において「共生」を目指していかなければいけない時代だと思っていますが、その「共生」を考える時に、東南アジア、特にインドネシアの人びとに阿部知二の作品を読んでもらい、それを理解・評価してもらいたいと願っています。文学のレベルで、お互いに「徴用作家」について論じ合うことが、歴史を共に作り、共に生きていく作業につながるのではないかと思っています。インドネシアの人だけでなく、オランダの人にも読んでもらう必要もあるでしょう。そのかわりに、私たちはオランダの旧植民地であったジャワから帰国した人たちの傷痕を描いた「引揚者文学」も読んで、研究しなければならないと思います。時間がオーバーしてしまいました。あとは、みなさまからのご質問に答える形で、話を進めたいと思います。

（講師　立命館アジア太平洋大学教授）